

FORUM

Vol.18

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第18号

CONTENTS

巻頭言 2

公立大学法人大阪府立大学理事（広報渉外担当）
広報渉外部長
学術情報センター長 今井 良彦

コラム 3

社会貢献で培う教育力

大阪府立大学生涯教育センター長 山本 章雄

＊読者の声＊

平成24年度公開FDセミナー報告 4

—学びへの視線の転換

eポートフォリオによる学習・教育改革—

大学教育学会 7

第34回大会に参加して

編集後記 8



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

巻頭言

● 公立大学法人大阪府立大学理事（広報渉外担当）
広報渉外部長
学術情報センター長

今井良彦

YOSHIHIKO IMAI



今井 良彦

YOSHIHIKO IMAI

公立大学法人大阪府立大学理事（広報渉外担当）
広報渉外部長
学術情報センター長

1952年生まれ。1974年京都大学工学部卒業。同年パナソニック株式会社入社。AV関連の事業所・研究所、システムエンジニアリングセンター所長を経て、2007年パナソニックアドバンステクノロジー株式会社代表取締役社長。博士（工学）。2011年4月公立大学法人大阪府立大学理事に就任。

社会で学び続ける力

「学力」の低下が指摘され、大学教育の質保証の議論が花盛りです。中央教育審議会では大学教育に求められることとして、「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を挙げています。昨年まで企業に40年近く勤めた経験から、企業が大学教育にどのような期待をしていたかを振り返ってみたいと思います。

30年ほど前には人事部門から依頼されるリクルーターとして、10～20年前は自分の部下として技術者・研究者を一本釣りする立場で、最後の5年は最終面接者として技術系社員の採用に関わってきました。20～30年前は日本企業にも体力があり、基礎研究部門を持っている企業も多くありました。地頭のみを期待し、企業に採用してから2～3年かけてじっくり養成するだけの余裕がありました。専門分野も大半は「染め直す」ことを前提にしていました。

この10年を見ると、企業の採用方針は即戦力重視に移ってきています。即戦力といっても大学で身に付けた専門知識が、企業に入社してすぐ現場で通用するということではありませんが、初期値として期待する部分がそれまでと比べて大きくなっています。専門分野ごとに特定の大学研究室をターゲットにして一本釣りしたり、入社までにマッチング面談をすることで少しでも即戦力に近い学生を採用するようになりました。専門分野以外でも英語や文章力、コミュニケーション能力は特に即戦力部分として求められるようになりました。これ

らは企業の余裕の無さ、訓練能力の低下を示していますし、早期退職の増加などいわゆる労働の流動化も一因になっています。一方で、専門知識の陳腐化は年々加速しており、大学の4～6年で得たものだけでは入社後の35～40年はもちません。

入試による地頭の一定の質保証と科目教育による基礎知識は必要ですが、さらに大事なことは、企業にはいってからも学び続ける意欲と能力です。新しいことに興味を持ち、解く意味のある課題を設定する力や、「モデル化」、「仮説を立てる」、「検証する」、といったプロセスが応用力も含めて身につけているかどうかのポイントです。学業成績のみならず、社会に出て企業で成長するために学び続ける術を大学で身につけることが、これまでも増して重要になっています。できれば社会に出てから学び続けるモチベーションにつながる小さな成功体験が大学の学びで得られていれば理想的です。

企業で伸びるためには学ぶ力に加えて適応性も大事です。定年まで同じ仕事を続けられる人はほとんどいません。職種も変わります。学び続ける力は汎用的なプロセスとして身につけておく必要があります。ひとりだけで仕事することはほとんどありませんのでリーダーシップ、役割意識、協調性も採用面談では必ずチェックされる部分です。多くの企業に余裕がなくなった今日、大学教育に期待されるものはさらに大きくなっています。

社会貢献で 培う 教育力

大学に対する社会からの要請が多角化する中、学内の業務に携わる関係者の責務はますます多様化してきています。

グローバル化が進み、さまざまな文化や価値観を相互に理解することが国際社会の必須な条件となり、ヒッグス

粒子の発見に象徴されるように科学技術が加速度的に進展する中、これに伴う人間生活の様式はスピード化、複雑化、多様化してきています。また、このような社会全体の構造変容により、そこで生活する人々の人間関係にも質の変化が激しく起こっています。

このような現代社会の潮流の中、状況を精緻に分析し、対応策を思索し、長期にわたるビジョンを構築して行くことは、大学に課せられた大きな責務と言えます。また、物事を真摯に探求する姿勢を持ち、そこから得られた知見を身につけた人材を育成してゆくことも大学の重要なミッションの一つです。一方、2006年(平成18年)の教育基本法改正により、人材育成といった間接的な社会貢献だけでなく、大学自体が直接的に社会に働きかける貢献が求められるようにもなりました。つまり、大学が従来より課せられていた「研究」と「教育」という責任に加え「社会貢献」という新しい任務が、大学関係者全員に付託されることとなったのです。

大阪府立大学では、このような状況を踏まえ“高度研究型大学”を目指した体制を整えるため、

平成24年度より「リサーチ・アドミニストレーションセンター」を開設し研究戦略を全学的な視野で強化する施策を講じる一方、優秀で社会に貢献できる学生の育成を目指したミッションに関しては「高等教育開発センター」を中心に、教育システム(カリキュラム・環境)の整備および教員の資質向上(FD活動など)に取り組み、成果を挙げてきています。また、社会貢献においては、「生涯教育センター」および事務組織である「地域連携室」の協力により各種の公開講座を開催し、昨年度実績で81講座(延べ受講者数:35,369名)の事業を展開するに至っています。

しかし一方では、大学関係者の日常業務が多岐に及び教員も多忙を極める状況となっており、「教育」「研究」「社会貢献」の事業を連携させるなど、業務軽減に向けた何らかの対応、解決策が必要な状態であるとも言えます。研究と教育の連携は、大学の基盤業務として従来より推進されており、研究と社会貢献の連携は、産学官連携戦略室を中心に確立されつつあり、また公開講座にも活かされています。残る課題は教育と社会貢献の連携であり、対象者に学生と一般人といった違いがある、講義の質に専門的と教養的といった違いがあるなど難しい問題もありますが、違った対象者やレベルの講義を担当することがFDへの波及効果を生むことも十分に想像できます。また、授業の公開も一策と考えられます。

今後はこのような「ミッション・ミックス的」な事業展開を考えて行くことも必要ではないでしょうか。



山本 章雄

AKIO YAMAMOTO

生涯教育センター長

1952年兵庫県生まれ。東京教育大学(現:筑波大学)体育学部卒。大阪女子大学助手、講師、助教授を経て、2002年人間社会学部・大学院文学研究科教授。2005年大阪府立大学総合教育研究機構教授。2011年より地域連研究機構教授、生涯教育センター長。2012年より第4学群長、地域連携部門長。

読者の声

学内のコミュニケーションの充実をはかるため、今後の活動に反映させるため、「読者の声」を掲載しています。

本誌を読まれてのご意見・ご希望・身近な話題など、皆さまの声を紹介させていただく場とします。ふるってご投稿くださいますよう、お待ちしております。

櫻井 俊郎 (人文科学系・高等教育推進機構)

来年度に開講を予定している初年次ゼミの企画をどうしようか、頭を悩ませている最中である。大学生たるもの主体的に学習に取り組んで当たり前、と言うは易し。授業実践の中では、往々、理想どおりに運ばぬ現実と直面してきた(自身の学生時分を振り返ると、偉そうに言えた義理でもない)。自ら調べ、考え、論ずることの面白さを、乏しい持ちネタを使い、どう体感してもらうか。なかなか考えが纏まらぬ中、目に止まったのが、第16号・第17号所載の初年次ゼミ関連記事である。なるほど、手掛かりになりそうだと思いを撈りつつ、悩み乍らも一歩、計画を練ってゆこう、そんな思いを新たにしたい。

村岡 篤 (教育推進課 総務・企画グループ)

FORUM誌を読ませていただく度に、教職員の皆様の教育にかける深い情熱とその実践に感銘を受けます。国際化、情報化、少子化は言うに及ばず、他の意味でも大阪府立大学を取り巻く環境は大きく動いています。絶えることのない学生本位の取組の重要性は一層増しているように感じます。私も微力ながら学生の成長に向けて、不断の自己研鑽に努める所存です。(本欄の記載に当たり学内でFORUM誌の話題を出したところ、内容を十分に知らない方もおられました。誌面の素晴らしい取組をより多くの方々と共有できればよいと思います。)

高等教育開発センターWebの刊行誌ページに、投稿窓口を掲載しています。ぜひお寄せ下さい。

問題 本学では今年度より「eポートフォリオシステム」を導入しています。ポートフォリオの「フォリオ」の語源は次のどれでしょう?

- ① 葉 ② 木 ③ 船 ④ 机

「読者の声」の投稿と問題の解答は ➡ <http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/publication/>



「学びへの視線の転換 eポートフォリオによる学習・教育改革」

平成24年5月1日(火)

大阪府立大学中百舌鳥キャンパス 学術交流会館多目的ホール
はびきのキャンパスL305、りんくうキャンパス会議室(遠隔中継)

平成24年度より、大阪府立大学は、従来の学部・学科の枠組みから、学域・学類を単位とした教育体制(学域制)へと移行しました。これに合わせて、本学独自のeポートフォリオシステムを導入し、「学習・教育支援サイト」として運用を開始しました。そこで、近年、高等教育機関に導入が進むeポートフォリオの意義や今後の可能性について考えるべく、公開FDセミナー「学びへの視線の転換 eポートフォリオによる学習・教育改革」を開催いたしました。

セミナー前半は、東京学芸大学より森本康彦先生をお迎えして、eポートフォリオがなぜ高等教育機関で注目されているのか、そして、eポートフォリオは何を目指し、これからの高等教育をどのように変えていくのかについて、ご講演いただきました。また、セミナー後半は、本学で導入したeポートフォリオシステムについて、導入責任者である高等教育開発センターの星野より、導入の経緯とねらい、システムの特徴について報告しました。以下は、その要約です。

「高等教育におけるeポートフォリオの可能性」



東京学芸大学 准教授 森本 康彦

高等教育機関において、教育の質保証・質向上を達成するためのツールとしてeポートフォリオの導入が広がっていますが、その背景には、教育における学習・評価理論のパラダイム転換があります。すなわち、「暗記中心の学習」から「経験による学習」へ、「教師中心」から「学習者中心」へ、「知識は与えられるもの」から「知識は自ら構成するもの」へ、そして「ある時点でのテストによる客観的な評価」から「継続的なパフォーマンス評価」へ、といった転換を背景に、パフォーマンス評価手法として、学習の成果を組織的・構造的にまとめた「ポートフォリオ」が必要とされているのです。そこでは、学習者による「分かった!」という気付きを促すための、学習者自身による自己評価(リフレクション、ふり返り)や相互評価・他者評価が学習の中に埋め込まれていることが大切であり、特に、電子化されたポートフォリオ(eポートフォリオ)はこれを手助けしてくれるのです。

また、現在は、プロセス評価のために活用されるだけでなく、学習成果のエビデンスを示すためにeポートフォリオが活用されており、この2つの活用に対応することが今のeポートフォリオには求められています。

ただ、eポートフォリオ自身は名脇役に過ぎず、主役はあくまで学生です。学びを促進するツールとして、また学びのネットワークの起点としてeポートフォリオを活用してください。eポートフォリオシステムは、大学教育が変わるための最善のツールになる可能性を秘めています。その可能性を大きくするか小さくするかは、先生方、職員の皆さん、そして学生の皆さんにかかっています。

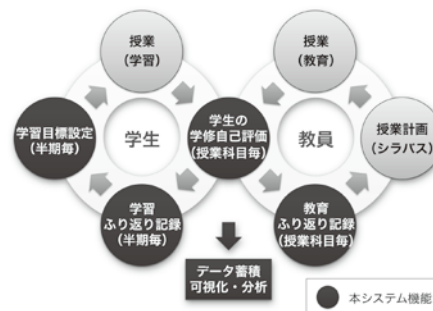
「大阪府立大学のeポートフォリオで目指すもの」

大阪府立大学 教授 星野 聡孝



学生に直接的なメリットをもたらさない等、授業アンケートが抱える諸課題に対処しようとする中から、本学のeポートフォリオの仕組みは考え出されました。本学のeポートフォリオの核にあるのは、学生による授業科目毎の学修自己評価です。学生には、自らの学びのプロセスを、達成度とともに自己評価してもらい、これを半期単位で蓄積し可視化していきます。これに加え、半期毎の学習目標を期初に、学修自己評価や成績などを踏まえた上での半期全体の振り返りを期末に、記入してもらいます。これを通して、目標の意識化、自身の学びを見つめる力(メタ認知)の育成、学びについての気づきを促しつつ、学生の学習自己管理能力を高めてもらう事を目指しています。

また、蓄積された学修自己評価データから、教員は、学生が何をどのように学び、どれだけ身に付けたかを知り、自身の授業に対する気づきを得る事ができます。本システムは、学生にとってのポートフォリオとしてだけでなく、教員にとってのポートフォリオとしても機能するよう作られています。そして、このような仕組みを、授業支援システムや教務学生システムなどの他システムと連携させながら、「学習・教育支援サイト」として、日常的な学習・教育環境の中に埋め込んでいる所に、本学のeポートフォリオシステムの大きな特徴があります。



大阪府立大学のeポートフォリオシステム(学習・教育支援サイト)

ここでは、本学のeポートフォリオシステムである「学習・教育支援サイト」の学生用画面を紹介します。

前の半期の振り返り入力画面

半期の各種情報表示(成績、学修自己評価等)

・半期学習目標に対する振り返り
・大阪府立大学学士課程の目標に対する振り返り

学習・教育支援サイト

シラバスへのリンク (Plan)

授業支援システムへのリンク (Do)

受講中の科目 (Do)

授業振り返りへのリンク (Check)

半期単位でのPlan-Do-Check、授業科目単位でのPlan-Do-Checkを、学習・教育支援サイトのホーム画面に集約しています。

授業振り返り(学修自己評価等)入力画面

・各回内容理解度
・到達目標達成度
・授業で身に付けた内容
・到達目標達成度自己分析 など

半期学習目標(2012年度前期)分析

今年度(2012年度)4月、大阪府立大学は、学域制の下で初めての入学生を迎えました。彼らには、大阪府立大学のeポートフォリオシステム(学習・教育支援サイト)を通して、まず、今年度前期の学習目標を記入してもらいました。ここでは、彼らが記入した半期学習目標について分析した結果の一部をご紹介します。

表1は、1年生が記入した全テキストに含まれていた単語(名詞)の、学生1人当たりの出現頻度上位10位までを学域毎に並べたものです。大学全体では「単位」が1位となっていますが、その出現頻度は、学域によって大きく異なります。「単位」と同様、成績に関係する「GPA」(= Grade Point Average)が上位に入っていることから推察できるように、特に工学域では、学生は成績に対する意識が比較的高いようです。これは、今回の学域制移行に伴い導入された制度、すなわち、2年次以降の課程配属先が1年次の成績などによって決まる制度とも関係がありそうです。

表1 2012年度前期の学習目標として書かれた全テキストデータに含まれる単語(名詞)の出現頻度(学生1人当たり)

	現代システム		工学		生命環境		地域保健		全体	
1位	単位	0.241	単位	0.365	単位	0.382	授業	0.401	単位	0.309
2位	授業	0.238	授業	0.307	勉強	0.234	復習	0.231	授業	0.289
3位	大学	0.188	GPA	0.261	授業	0.231	勉強	0.207	勉強	0.200
4位	勉強	0.145	以上	0.247	復習	0.188	単位	0.186	大学	0.181
5位	学習	0.136	勉強	0.209	大学	0.178	大学	0.174	復習	0.159
6位	身※	0.127	大学	0.181	以上	0.145	自分	0.165	以上	0.149
7位	自分	0.120	復習	0.165	予習	0.142	予習	0.157	GPA	0.144
8位	生活	0.120	英語	0.153	科目	0.138	学習	0.153	学習	0.122
9位	基礎	0.099	予習	0.139	GPA	0.123	科目	0.136	予習	0.122
10位	知識	0.096	生活	0.108	学習	0.117	知識	0.107	自分	0.121

※身に付けたい

次に、書かれた内容を「成績」「学習」「英語」「生活」「将来」に分け、各内容に言及した学生の割合と学生の所属学類(学域の下に位置づけられる)との関係に対応分析の手法を用いて調べてみました(図1)。図1において、座標原点(+のマークで示された所)付近にある学類(自然科学類など)は、各内容に言及する学生の割合が大学全体での割合と比較的近いことを示しています。一方、教育福祉学類では「将来」への言及割合が比較的高いところにその特徴がある事が分かります。このように学類毎の特徴はあるものの、同一学域内の学類が比較的近くにプロットされていることから、全体としては、学域単位での特徴を有していると言えるでしょう。

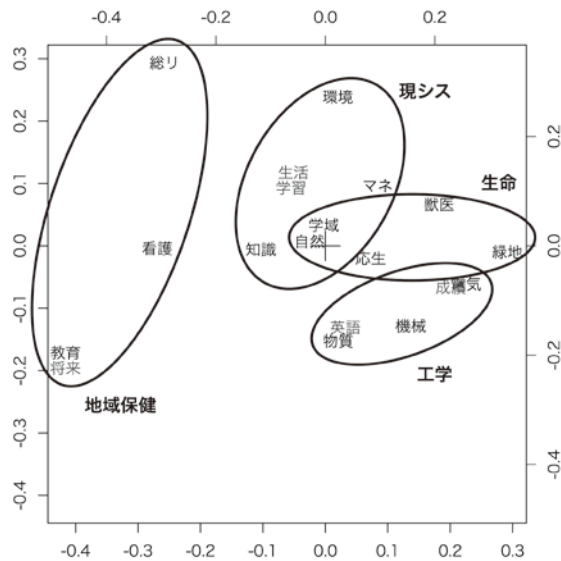


図1 学習目標として「成績」「学習」「英語」「生活」「将来」に言及した学生の割合と、学生の所属学類との対応分析結果

(星野)

大学教育学会 第34回大会に参加して

会 期 5月26日(土)～27日(日)

会 場 北海道大学高等教育推進機構

テーマ 「転換期の大学教育」

大会でのラウンドテーブルは、会員の研究活動を活性化し、さらに学会全体で共有できる研究課題を発掘するために行われているものです。本学からは、2つのテーブルに参加しました。

ラウンドテーブル16「カリキュラム・マネジメントにおける教職協働」

..... 青 木 智 (学生課 学務グループ 課長補佐)

今回、私は新緑のさわやかな北海道大学で開催された大学教育学会第34回のラウンドテーブル16の「カリキュラム・マネジメントにおける教職協働」の指定討論者として参加させて頂いた。当日発表された「大阪府立大学調査概要」については、2月29日に、寺崎先生(立教学院)、佐々木先生(立教大学)及び当日発表者の清水先生(阿南高専)が本学でのヒアリングを元に取りまとめたものである。このラウンドテーブルでは、いわば、府立大学の大学改革における証言者として参加するとともに、教職協働のあり方について、自分自身も勉強させて頂いた。発表後、司会者から各指定討論者に対し、教職協働を行う上で、苦労した点、役割や意識した点など掘り下げた質問を通じて、発表者、参加者等が一体になって学習を進めた。特に、限られた時間の制約の中で、学長のリーダーシップについては、熱心に聴いて頂いた。教職協働の現場において、今、何が起きているのか、また、何が課題かを正しく分析し、今、何をすべきか。さらに、自分に何が出来、何が出来なく、その場合はどのように組織を動かすのか、自ら考え、自ら行動することが求められていること、このことを今回のラウンドテーブルを通じて再認識した。

また、自由研究発表Iでは、部会5の多様な試み及び部会14の学生・学習支援に参加させて頂き、大学教育学会の幅広い研究成果に触れ、大変有意義な二日間を過ごした。大学職員、特にプロパー職員においては、このような機会を活用し、自己啓発されるようお勧めしたい。



ラウンドテーブル12「大学IRコンソーシアムの可能性—取組の事例報告と今後への期待」

..... 大 坪 伸 行 (教育推進課 総務・企画グループ)

今回の大学教育学会第34回大会には、5月26日(土)ラウンドテーブル12「大学IRコンソーシアムの可能性—取組の事例報告と今後への期待」の発表者の1人として参加させていただきました。学会会場となった北海道大学の山田邦雅先生をはじめ、同志社大学の江原昭博先生、甲南大学の伊庭緑先生と約30分ずつの報告と質疑応答を行い、最後に総括質疑応答という形で進めました。ご参加いただいた方々はIRに関心の高い方が多く、熱心な質問が相次ぎ、私の報告時にもIRシステムのデータ保管場所やIRツールについてのご質問をいただきました。その後の総括質疑応答では、本学の高橋哲也副学長、同志社大学の山田礼子先生にも参加いただき、IRコンソーシアムについて、参加者の方々にご理解いただけたものと思います。また、今回の教育学会では、自由研究発表においても「IRの活用」のテーマで九州大、佐賀大などの取組例が紹介されるなど、IRへの関心の高さが伺われました。

「FORUM誌」読者には既になじみ深いキーワードと思いますが、IRとはInvestor Relationsではなく、Institutional Researchのことですので、念のため申し添えます。

編集後記

大学は、「教育と研究」を長く課題としてきました。公立大学である本学は、教育と研究のみではなく、第三のミッション「地域貢献」に本格的に取り組んでいます。教育と研究については、大学というものの長い歴史のなかで、さまざまに議論がなされてきました。その中で、研究から教育へ、そして、教育から研究へ、という教育と研究の関係も、理論的かつ実践的に考察されてきました。今後の本学の課題は、教育と研究と地域貢献という三つの課題を実践的に果たしていくだけにとどまらないでしょう。三つの課題の関係について、十分に議論し、理論的考察を行ったうえで、実践していくことでありましょう。もちろん、高等教育開発センターは、三つの課題の関係を、教育の場に活かしていく方策を考えなければなりません。(高根)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース『FORUM』

平成24年8月31日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
高等教育推進機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

〈編集委員〉 新井 隆景（センター長） 大木 理 兼田 博 小島 篤博 高根 雅啓 高橋 哲也 谷口 栄一 車 美愛 塚本 民雄
林 利治 星野 聡孝 水鳥 能伸（副センター長） 山口 義久 松室 光 廣島 はるみ（事務担当）

この冊子は1600冊作成し、1冊あたり48円です。